

#授業の目的と概要

貿易摩擦などの経済的コンフリクトや領土問題などの政治的なコンフリクトは、価値観を共有するが故に生じる衝突です。しかし宗教の対立などの文化的なコンフリクトは、価値観の対立です。価値観の対立は、すべて理論的に解決可能でしょうか。それとも理論的に解決不可能な対立が存在するのでしょうか。もしこれを認めるならば、あなたは価値相対主義者ないし文化相対主義者になるでしょう。理論的に解決不可能な価値観の対立があるとすると、それはなぜ理論的に解決不可能なのでしょうか。その要因にはどのようなものがあるのでしょうか。これらの問いに答えるために、まず文化とは何か、文化問題とは何か、を考察します。次に文化的なコンフリクト、あるいは価値判断の対立に出会うときに何が起きているのかを考察するために、文化の翻訳について分析します。最後に、文化相対主義の可能な形を考えたいと思います。

#学習目標

- 文化の構造と言語の構造の関係を理解すること
- 文化問題と社会問題と個人問題の関係を理解すること
- 文化相対主義と翻訳問題の関係を理解すること

#「あなたは文化相対主義者ですか？」

この問いに答えるためには、

「文化相対主義とはなにか」

に答えなければならない。この問いに答えるためには、

「文化とは何か」

「相対主義とは何か」

に答えなければならない。

#「相対主義とは何か？」については、一学期に検討した。

そこでの暫定的な答えは、次のとおりである。

相対主義＝同一の意味で理解された文が、異なる評価をもつことを認める立場

相対主義と言われていたものを、私たちは、文脈相対主義と評価相対主義（新相対主義）に分けることができるだろう。文脈主義とは同一の文が、使用の文脈によって異なる意味を持つことである。したがって、異なる意味を持つ文についての評価が変化したとしても、そこには問題はない。それは、相対主義の見掛けを持つだけであって、本当の相対主義ではない。

評価相対主義の問題点、

- ・もし評価の基準を明示的に語る事ができるならば、評価感受的な差異は、文脈感受的な差異に書き換えることができる。この場合には、文脈主義で説明できる。
- ・もし評価の基準を明示的に語る事ができないならば、意見の違いがあるとき、評価の違いなのか発話の理解内容の違いなのか、区別ができないだろう。この場合には、文脈主義と評価相対主義を分けることができない。
- ・そうすると、評価相対主義を積極的に語ることは難しいのではないだろうか。すくなくとも、理論的な問題に関する限り、私の考えは、ネガティブである。

相対主義をこのように理解するとき、理論命題や事実判断に関して、相対主義を採用できるかどうか、残念ながら一学期には、最終的な答えを提供できませんでした。

パラダイムの共約不可能性＝異なるパラダイムが、相互に翻訳不可能であること
共約不可能なパラダイムがあるとすると、そのどちらが優れているかを理論的に決定することはできない。パラダイムの共約不可能性については批判があり、バーナード・ウィリアムズも、自然科学については、パラダイムの共約不可能性に関して懐疑的であるが、文化に関してはその可能性を認めている。（バーナード・ウィリアムズ『生き方について哲学は何が言えるか』森際、下川訳、産業図書、260）

「文化とは何か」

文化とは、文化問題に対する答えである。

広い意味での文化問題とは、すべての問題である。

狭い意味での文化問題とは、社会問題と個人問題を除いた問題である。

具体的な社会問題については、構築主義者が人々の訴えによってそれが構築されていることを示すように、具体的な文化問題についても、人々の承認によってそれが構築されていることを示すことができるだろう。ラベリング理論。

「文化相対主義とは何か」

・言語論的展開によってすべての現象が言語によって構築されていることが主張される。そこから、社会制度や現象が、言語によって社会的に構築されていることが主張されるようになった。

・社会構築主義は、言語の恣意性に基づいて、構築の恣意性を主張することになる。そこから、社会相対主義や文化相対主義が帰結する。

・もし「構築が恣意的であるにもかかわらず、切実性をもつ制度が成立したり消滅したりするのはなぜか？」という問題が設定されるとすれば、それに対しては、社会制度（社会組織と社会規範）は、社会問題、文化問題に対する答えであるからだと答えることができるだろう。

しかし、社会制度や文化は、相対的である。

#社会構成主義は整合的か？

The social constructivism claims that every culture is socially constructed.

Then the (1) seems to hold.

(1) Every culture is equal in value.

But we cannot claim (1), because (1) itself is a value judgment. The value claim (1) seems to be prior to all other claims. Then the (1) is contradictory to its content. Therefore we should say;

(2) Every culture cannot be compared with other ones in value.

The (2) would be a factual belief. Then this argument presupposes the separation of factual beliefs and value beliefs. If we don't accept the separation, this factual belief (2) must entail some value belief. A contradiction rises again.

もし事実と価値の二元論を採用するならば、(2)は整合的な主張になるだろう。

しかし、「事実と価値の二元論か一元論か」への答えを、事実判断とみるか、価値判断とみるかの対立があるだろう。